

月刊 JMITU 三石三石

新型コロナ対応版



6月号

日本金属製造情報通信労働組合大田地域支部
セガ グループ分会 2022年発行

No.450

参議院選挙でくらしといのち 平和を守る政治を実現しよう！

7月10日投開票で参議院
選挙が行われます。

消費税の減税

かたてない

円安と物価高騰

今かたてない物価高騰が暮
らしを直撃しています。

電気やガスのほか食品や生活
必需品が続々と値上げ、背景
には石油や小麦など燃料や原
材料価格の高騰があります。
ロシアによるウクライナ侵略
によって、天然ガスや小麦な
どは今後も価格上昇が続くと
予想されます。最低賃金は昨
年、平均で約3%引き上げら
れましたが、物価や社会保険
の負担はそれを上回る勢いで
上がっています。

物価高騰から暮らしを守る

為には、大幅な賃金の底上げ
とあわせて消費税の減税が必
要不可欠です。消費税減税を
実現するためにも、大幅に引
き下げられてきた大企業の法
人税率や高額所得者の所得税
率を元に戻すこととともに、
大企業の内部留保や金融取引
への課税強化が必要です。

軍事費を削って医療

社会保障の充実を

自民党は5年以内に今の軍
事費を倍の1兆円にまで増
やすと提言しています。その
ような財源があるのであれば、

医療や社会保障、教育に充て
るべきです。

ロシア、ウクライナの戦争
のように、軍事力を上げ、脅
威を増すことにより、戦争に
発展してしまうこともあります。

最近のニュースでも、人生
に嫌気が差した。事件を起こ
せば刑務所に戻れると思っ

普段の社会生活より、刑務
所で暮らす方が幸せなどと思
えるような社会は、大問題で
す。減ってきているが、年間
2万人の自殺者が出る社会の
中で、はたして今優先すべき
は軍事費なのだろうか。

異次元の金融緩和

政策の見直しを

物価高騰の原因には、安倍
政権以降進めてきた異次元の
金融緩和政策がもたらした円

安があります。円安により大
企業は空前の利益を上げてい
ます。今求められているのは、
大企業の利益優先ではなく、
国民の暮らしと雇用を守る政
策の転換です。

減らない年金制度の実現

政府は現役の賃金が下がっ
ていることを口実に4月から
年金を下げました。かたてな
い物価高騰にもかかわらず年
金下げられた背景にはマク
ロ経済スライドがあります。

この制度を廃止し、減らな
い年金制度とすべての高齢者
にまともな生活を保障する最
低保証年金を実現すべきです。

選挙に行き、この政策だと
思う政党に投票していきまし
よう。

仙洞田一彦

電車の端の席に座っていた。

ほとんどの車両は、向かい側も三人掛けの席になっているが、その車両だけは車椅子や、ベビーカーが乗れるようになって

いているのか、向かい側に座席はなかった。そこに五、六人立っていた。平日の昼過ぎだから仕事する人達の移動時間にあたるのか、比較的混んでいた。かく言う私も午後

に会合があったので、その会場に向かうために乗っていた。朝からずっと曇り空で、いつ降られても良いように折り畳み傘を持ってきた。無論降らないことを望むが。「梅雨入りしたと思われる」と発表が

あった通り、どんよりした空のもと蒸し暑い。梅雨が明ければ猛暑がやって来る。先を思うとうんざりする。

「トイレに入っている間に財布を持って行かれてね……いや、小銭入れはポケットに入れたままだったから、小銭は持っている……」

目の前の方から聞こえた。顔を上げて見たが、見える範囲の人は、片手は吊革に手をやり、片手でスマートフォン

の画面を見ている。通話している人はいなかった。どうやら、そういう人達の向こう側にいる人のようだ。続きが聞こえてきた。「だからね、これから行くから、ちよっと金を貸してほしいんだ」その言葉を聞いて、ピンと

きた。昔職場にいた男だ。

次の駅で、間にいた人が降りた。向こうの男の横顔が見える。男はスマートフォンの画面を見ている。画面上で指を動かし、耳に当てた。相手が出るのを待っているのだろう。しばらくして、また画面を操作し、耳に当てた。

会話とスマートフォンの扱いかから推測すると、「金を貸してほしい」と言って、相手から電話を切られたのだろう。また電話をして、話もしないうちに切られたのに違いない。執拗に動作を繰り返している。

男は電話かけに余念がない。伸ばしっぱなしの無精ひげだが。およそ三十年前の職場の同僚で名前を思い出せないが、たしかにあの男だ。足元には、布製の袋やスーパールの、今は

有料になっているポリ袋の大きいのが二つ置いてあった。

どの袋も丸く膨らんでいて、薄汚れていた。中身はわからないが、角張ったでっぱりがないから、衣類だろうか。何色というのか、薄い青と薄い緑の中間のような色の長袖シャツに同じ色のズボン。作業着のように見える。

私は顔を伏せた。顔を合わせたくない。電話の内容から、私だと分かれば「金を貸してくれ」と言うに違いないと思

ったからだ。断ることはできるが、不愉快な思いにさせられることも間違いない。当時、職場の誰彼かまわず金を借り、そのうち少額だが会社の金にまで手を付けて退職した。貸してくれという金はせいぜい三千円までだった

ようだが、返して貰った奴はいたんだろうか、と思う。

私の三千円も返って来なかった。本来なら、今ここで「返してくれ」と言うことのできる立場だ。時効かもしれないが、男の方こそ私と目を合わせたくないはずだし、こそこそ隠れてしまうはずだが、金を借りているという感覚はないようだ。少しでも「返さなければならぬ」という気持ちがあれば、あんなに平気ではいられないだろうと思う。

前に借りたのを返さないうちに、また貸してくれという。気の弱い奴だったら、貸した金も積もり積もった結構な金額になつていたかもしれない。私は二回目は断った。だからもう言つてこないだろうと思つたが、三回目、四回目と言つてきた。始めの三千円を返せない言い訳もないのだ。寄生という言葉が浮かぶ。「貸してくれ」とは言うが、借りたという意識はないようだ。それが怖い。断られても平気でまた「貸してくれ」という。それも怖い。断られたから、ダメだろうなどと考えないようだ。返済してないから、貸してくれないだろうなどと相手の気分、感情など全く考へていないようだ。だから逆に、断り続けること自体が心理的な負担になる。強い立場のはずが逆転してしまうのだ。

次の駅で降りて車両を移ろうかと思つたが、下手に動いて感づかれるのも嫌だつた。帽子を目深にかぶり直し、顔を上げないようにしていた。駅で止まったら男の方が先に下車した。ホツとした。男は下車する前に腰をかがめ、足元近くのコンセントからスマートフォン充電器を抜いていた。男が隅に立つたまま動かずにいた理由が分かった。スマートフォン充電器を電車から取っていたのだ。

私は会合を済ませて、夕方家に戻つた。家の固定電話の赤ランプが点滅していた。スマートフォン時代のなつて、留守番電話が点滅していることはほとんどなくなつていた。

受話器を取り上げ、点滅しているところを押した。録音されたメッセージが流れた。「昼間、挨拶もしないで申し訳ない。あの駅で降りなければならなかつたからさ。なつかしいね。昔を思い出しちゃつたよ。それでさ、トイレ行つている間に大きいおかね盗まれちゃつてさ、いま小銭しかないんだ。今夜か、明日行くから三千円ばかり貸してくれないかな。二千円でもいいんだけど」

私は左の腕を右手で、思ひつきりはたいた。やぶつ蚊がつぶれて、赤い血が散つていた。力を入れすぎて両手がしびれていた。